

いちばんしあわせな日

平成四年度

二年男児

カーンカン、カーンカン、だいくさんがトンカチでくぎをたたいている音が耳にひびきます。ぼくは、学校から帰るとすぐに、だいくさんが作ってくれているぼくの新しい家を見ます。道ろから、ぼくとおにいちちゃんのへやがよく見えます。丸くてかっこうのいいぼくたちのベランダも見えるので走っていきます。

「ぼくのへや、いつでぎんの。」

「十一月ころだあ。」と、だいくさんが言ったので、もうそろそろできるなあ、とわくわくしてうれしくなってきました。

一かいのおじいさんとおばあさんのへやは、もうほとんどできていたので、もうすぐ入られると、二人でうれしそうににこにこしています。火を出してしまった一月のおばあさんの顔とはくらべものになりません。

一月十九日の朝、八時になってもお父さんもお母さん

もおきてこなくて、ぼくとお兄ちゃんは、二人でベッドで本を読んでいました。

おばあさんがだいどころで、天ぷらをあげているにおいがふんぷんしてきました。おいしそうなおいでした。しばらくすると、だいどころの方からピカッピカッと光がでてきました。お兄ちゃんがようすを見にいったら、今まで出したこともない大きな、おっかない声で

「火じ。火じ。火じだあーとさけびました。お兄ちゃんの声に、お母さんとお父さんがとびおきて、大きなまくらを天ぷらなべになげました。火をくいとめようとしても、火はきえないで、ぼうぼうもえてひろがりました。

「しゃこに、みんなにげる。」というお父さんの声で、はだしで外にとび出しました。後ろでバーンとガラスのわれた音がしました。ぼくは、「しょうぼう車早く来い。早く来い。」とかみさまにたのみました。

家の半分がすっかりやけて、家ぞく七人、ふじ見町のせまいアパートでくらしています。みんないらいらし、きょうだいげんかの多い毎日です。でも、もうすぐひっこし。

おばあさんが明るく顔をしているので、いっぱい話をしています。

ぼくの一ばんしあわせな日が、もうすぐやってきます。